

國學院大學學術情報リポジトリ

豊臣政権の奉行人組織と蔵入地支配

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 俊哉, Kimura, Shunya メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2526

論 文 要 旨

学籍番号	203301	氏 名	木村 俊哉
論 文 題 目： 豊臣政権の奉行人組織と蔵入地支配			
(内容の要旨) 本論文は、豊臣政権の蔵入地（直轄領）支配の特質を、政治機構という視角から追求したものである。ここでいう「政治機構」とは、中枢の奉行人組織（中枢機構）及び地方の蔵入地代官（代官機構）を指す。 豊臣蔵入地の研究は、未だに豊臣政権による強圧的統治や政策の貫徹性の強調という六十年代の評価で停滞しているきらいが否めない。このような研究状況を前進させるため、蔵入地を統括する政治機構像の再構築を目指した。 第一章「秀吉権力と畿内・近国蔵入地」では、蔵入地分類の再検討と初期代官の動向を検討した。管理形態としては（い）吏僚代官型、（ろ）土豪代官型、（は）大名代官型の三型が見受けられる。初期は小出吉政のような吏僚代官、伊藤吉次のような土豪代官が勘定方の重要な地位にあり、譜代の家臣を持たない秀吉権力においては、初期代官の役割が大きかった。 第二章「豊臣「算用奉行」の政務処理」では、蔵入地を統括する奉行人組織（算用奉行）の発給文書を考察した。奉行人組織は個々の蔵入地の役割に応じた形で算用状を発給し、明確に用途を分類・明記することで代官による恣意的行動を排除しようとした。機能別の「算用状」発給や市場動向を見越した金替政策は、全国の蔵入地代官を統御する意義を有していた。 第三章「大名代官の支配と算用制」では、現地で出納を掌る大名代官に焦点を当てた。山内一豊や加藤清正は（１）知行地と蔵入地の算用が区分されていない、（２）領国経済の負担、（３）年貢未進の多発、といった背景のもと、算用の「無沙汰」を引き起こし、中枢からの命令にも反対行動を示した。遠国の大名代官型蔵入地においては、算用の停滞を始めとした「杜撰」な支配状況下にあったと結論付けた。 第四章「吏僚代官による支配構造 ―筑前・筑後を中心に―」では、筑前・筑後の豊臣蔵入地を中心に、吏僚代官型支配の実態がいかなる様相であったのかを検討した。石田三成・浅野長政両代官共に、確実な年貢収納を志向する一方、実態としては妥協や停滞が現実的問題として相次ぎ浮上しており、難航していた部分が大きかったと結論付けた。 豊臣政権は、中枢機構の成熟が窺える反面、代官機構の未成熟という問題を抱えていた。代官にとって統一的なマニュアルは存在せず、個々の才覚による支配が求められた。こうした代官側の事情を考慮せず、中枢の奉行人組織が算用の完遂のみを求めた結果、内部分裂に繋がったといえよう。（文字数 1000 文字）			
キーワード（5 語）			
豊臣秀吉、蔵入地、奉行人、代官、算用			